専門家会議

Meeting of Japanese Art Specialists

2019 年 1 月 19 日（土）　於東京国立博物館　平成館第一会議室
January 19 (Sat.), 2019; Meeting Room 1, Heiseikan, Tokyo National Museum

2019年1月19日（土）専門家会議

趣　旨

北米・欧州・日本の日本美術学芸員が業務上で直面する問題についての討論および情報交換

会　場：東京国立博物館　平成館第一会議室

議長兼進行：今井　敦　東京国立博物館 学芸研究部調査研究課長

出席者

（北米）

ローラ・アレン	サンフランシスコ・アジア美術館
モニカ・ビンチク	メトロポリタン美術館
アンドレアス・マークス	ミネアポリス美術館
アン・ニシムラ・モース	ボストン美術館
シャオチン・ウー	シアトル美術館

（欧州）

ルパート・フォークナー	ヴィクトリア＆アルバート博物館
矢野 明子	大英博物館
ウィブケ・シュラーペ	ハンブルク美術工芸博物館
アイヌーラ・ユスーポワ	プーシキン美術館
メンノ・フィツキ	アムステルダム国立美術館

（日本）

樋口 智之	仙台市博物館
塚本 麿充	東京大学東洋文化研究所
奥 健夫	文化庁

（国立文化財機構）

今井 敦	東京国立博物館
浅見 龍介	東京国立博物館
鬼頭 智美	東京国立博物館
救仁郷 秀明	東京国立博物館
三田 覚之	東京国立博物館
朝賀 浩	京都国立博物館
井並 林太郎	京都国立博物館
マリサ・リンネ	京都国立博物館
内藤 栄	奈良国立博物館
翁 みほり	奈良国立博物館
望月 規史	九州国立博物館

白井 克也	九州国立博物館
江村 知子	東京文化財研究所
米沢 玲	東京文化財研究所

アドバイザー

井上 洋一	東京国立博物館
富田 淳	東京国立博物館
田沢 裕賀	東京国立博物館
栗原 祐司	京都国立博物館
島谷 弘幸	九州国立博物館
山梨 絵美子	東京文化財研究所

討議概要

議長から、来年のオリンピック・パラリンピック東京大会を控え、日本の博物館はインバウンド対応として作品への外国語による説明が求められ、東博では約2年前から日本語、英語、中国語、韓国語、4言語の解説をつけているが、日本美術についての予備知識を持たない外国人向けに、文化的な背景などを含めた詳しい説明が必要だという声や、外国人は必要な部分のみを読むため、解説は長ければ長いほどよいという声も聞かれる。どの程度の分量の情報を、どんな方法で提供するのが適切か。また、ミュージアムにおいて異文化を理解してもらうということはどんなことかを考える場にしたいとの趣旨説明があった。

これを受け、東京国立博物館の情報提供の在り方と、解説の字数が制限されるといった課題がヴォズニ氏から紹介された。たとえば、仏像の展示室では4か国語の題箋とは別に、解説を日本語で約119字、英語、中国語、韓国語では30字にしているため、外国語では重要な情報を1、2点しか入れられない。そこで、国宝や重要文化財など重要な作品には長い外国語の題箋をつけ、その他の作品には題箋することを議論している。また、実際の外国人来場者の約半分は中国人と韓国人で、英語を話す人たちは4分の1以下であるため、英語の解説をメインの立場に置くことに問題はないか。解説は現在の長さでよいか、外国の方にはどのくらいの情報が必要か。さらに、中国語と韓国語の解説は音声ガイドやiPhoneやスマートフォンで対応するにはどのようなことが必要かといった問題提起がなされ討議にはいった。

まず、題箋について次のような意見があった。作品によって、長くする必要がある作品と短くしたほうがよい作品もあるが、重要なことは、来館者がどうフォローアップできるか。多くの情報をウェブサイトに掲載すると利用法が広がる。その場合、題箋に作品の登録番号を表示することが必須、それがないとデータベースで検索することが困難になる。また、限られたスペースで内容をどう伝えるのかという課題はどの館でも共通した問題であるが、英語などある言語を優先する必要はない。来館者に主要なメッセージだけを伝えればよい。解説を書くとき、その作品に興味を持ってもらえるような内容から始めることを念頭において、学芸員が熱意を持って感じていることを書くべきだ。その作品の個性のようなことを伝えるべきであるいった提案もあった。

これに関連してマリサ・リンネ氏から、日本のミュージアムにおける国際化の長期的な目標は何か、長期ビジョンが必要であるという指摘があった。大英博物館の来館者のうち25%はイギリス人、75%は外国人。ルーブルも同じような状況にある。

日本の国立美術館は、大英博物館やルーブル美術館のように国際化された館になりたいのか。国際化を考えるのであれば、題箋の長さをどうするか、デザインはどうするかといったことは長期ビジョンにのっとって考えるべきであると。

さらに、なぜ、6週間で展示替えをするのか。外国には、それほどの高頻度で展示替えをしている館はない。作品の出入りが激しいと、作品へのストレスが増えるため、頻繁な展示替えは必要ないのではないか。頻度が少なければ題箋の問題も手間も省けるといった質問があった。これについては、国宝や重要文化財は材質に脆弱なものが多いため、展示期間は年間60日間以内という原則を設け、それを超えて展示できないことと、季節感にあわせた展示をすることがあるため展示替えをしているとの説明がなされた。

解説は、どういう形で伝えるかというだけではなく、博物館全体の考え方と密接に結び付いていることが議論で明らかとなった。

次に、議長から、昨日のシンポジウムでは、ミュージアムは一方的に一つの解釈、知識を与える場ではなく、異文化理解にあたってのネゴシエーションの場であるということで意見が一致したが、ネゴシエーションのためには具体的にどのようなことをすればよいか、皆さんが試みたこと、成功した事例などを紹介してほしい。日本では漫画を古美術と一緒に並べるような展示はなかなか行わないが、ポップカルチャーとともに見せることで、非常に成功した例と、どのような効果があったか、どんな反応があったかもご教示いただきたいとの要請があった。

日本のことをあまり知らない若い世代は、自分たちにとってなじみのある側面から見るため、現代美術の展示は非常に人気を集め成功した。日本には外国の若者に人気の高いゲームアートがあり、それは特化したオーディエンスが対象となるため少し難しくなるが、現代美術も十分に考えられる。ただし、伝統的な美術と現代美術を組み合わせた展覧会では、入念な計画作りが重要になる。特に北米では、日本文化のより最近の状況を強調する傾向があり、日本のファッション文化やポピュラー文化などをより若い世代に焦点をあてた企画を試みられている一方で、伝統的なすばらしい日本美術をきちんと提示して、それを喜んでもらうこと、楽しんでもらうことも忘れるべきではないとの意見がだされた。

現代美術関連では、大英博物館で縄文時代の火焔土器の隣に手塚治虫の『三つ目がとおる』をならべて展示しているのは、『三つ目がとおる』の1ページに、火焔土器とほぼ同じ形のものがでているためであり、あちらこちらに漫画を散らしているわけではない。漫画を展示するのは、その作品に関係性がある場合だけだ。また、漫画はコレクションオブジェクトとしてではなく、保存するライブラリーブックという形で展示しているとの補足説明があった。

次に、議長から、東博では、この春の特別展では初めて、日本人向けの原稿と、外国語に翻訳するための原稿を違うものにすることを試みる。そのような対応をされている館はあるかとの発言があった。

これについて、九博では多言語表記について見直しており、そのなかで日本人向けの解説と翻訳用の解説を別にして、外国人用の原稿の日本語は短めに書く、その場合、どう書き分けるか、どうすれば観客にとって適切であるか昨年から議論している最中だとの報告があった。出席者の1人からは、最近の特別展で制作した4言語別のカタログについて説明があった。

多言語化とは単なる翻訳の問題だけではなく、内容、表現法、長さ、相手への配慮といったことを多角的に検討して書くことが重要であることとのことであった。

もう一つの話題として、オーディオガイドについてシアトル美術館や奈良国立博物館の事例が紹介された。また、東博の「トーハクなび」では、英語と日本語の題箋以上に詳しい解説が提供しており、館の入り口で「トーハクなび」のアプリがはいっているiPhoneを借りて聞くことも、自分のスマートフォンにアプリをダウンロードして利用することもできる。その欠点は、人の肉声ではなく翻訳的な人工音声が録音されていること。肉声の録音が必要かもしれないが、東博では年間、約300点の展示替えを行っているため、そのたびに新しい作品にナレーションをつけるには費用も時間もかかり、現実的ではない。アプリの開発には大変お金がかかるため、財政面でも長期ビジョンが必要であるとの説明があった。

最後に、アドバイザーからの次のような発言があった。博物館のすべての展示ごとに解説をつけてわかりやすくするよう努力しているが、海外の人に理解してもらった先に何があるのかといったことも考えながら仕事をしていくべきであることを、あらためて知ることができた。また、東博が直面している多言語の問題は、日本政府が打ち出した観光立国という政策に密接に関係している。2020年までに、海外からの訪日客が4,000万人にすることを目標に掲げ、博物館を観光資源にすべきとしており、その視点から多言語化を推進するようにとの指示がある。本日の議論を聞いていて、国立博物館の真の国際化とは何かということを、あらためて考えなおすよい機会になった。

司会より、次回皆さまと日本でお会いできることを楽しみにしているとのコメントがあり、専門家会議を終了した。

意見交換会

Feedback Session

2019 年 1 月 19 日（土）　於東京国立博物館　平成館第一会議室
January 19 (Sat.), 2019; Meeting Room 1, Heiseikan, Tokyo National Museum

2019年1月19日（土）意見交換会

会　場：東京国立博物館　平成館第一会議室

議長兼進行：ミウォシュ・ヴォズニ　東京国立博物館

抄　録

司会　最初に、カルコンの美術対話委員会から「このような交流プログラムを実施してはどうか」との提案をいただいて以降、東博は過去5年間、本事業を実施してきました。これまでは、国際シンポジウムとワークショップ、フィードバックセッション、エクスカーションという構成でしたが、今回は順番を変えて、ワークショップ、エクスカーション、シンポジウムとしました。テーマもエクスカーションの行先によって変えています。昨年は奈良にいったのでテーマは古代の仏教美術でした。その前年は九州にいき陶磁器をテーマに、今年は金沢を訪れ着物と陶器に焦点をあてました。本プログラムの準備がスムーズだったか、内容等がどうだったかといったことについて、忌憚のないご感想とご意見をお寄せいただければと思います。よろしくお願いします。

メンノ・フィツキ　非常に複雑な議題ですので、焦点を絞るのが難しかったと思いますが、もう少し焦点を絞ったコンテンツがあれば議論をもっと深められたと思います。もう1点、アジア人の日本美術の専門家も招待すればもっと視点が開けたのではないでしょうか。

司会　焦点を絞るべきだというご意見には賛成です。また、専門家会議で議論する内容を前もってお知らせすることも検討します。

ローラ・ヴィーゴ　私はポストコロニアル研究や日本美術をアジア以外の視点でどう見るかに関心がありますが、今回のプログラムはよく考えられていました。いろいろな驚きもありました。ただし、シンポジウムにもっと多くの参加者がいたら、さらにさまざまな現実を知ることができたと思います。

私どもの収蔵品は19世紀から20世紀初めの日本美術が海外で知られるようになった時期の作品が多いため、ある作品を選ぶとき、日本に関するオリエンタリズムの考え方が投影されます。オリエンタリズムについていろいろな意見を伺うことができた面白い内容でした。

中村 冬日　私は大学の人類学博物館でアジア全域を担当するとともに、大学のアジア研究学科、人類学学科と日本研究所にも所属し教えています。シンポジウムのテーマ、オリエンタリズムは植民地主義抜きでは語れないと考えます。特に、人類学は植民地主義と密接にかかわってできた学問ですから、常にそのことを考えています。日本は植民地を統治した側ですので、日本美術を語るとき植民地主義をどう考えるかという視点が、昨日の議論から抜けていたと思います。大英博物館でもアイヌや沖縄に関する展示を扱っていますし、私どもの館にもアイヌ、琉球のコレク

ションがあります。私が日本美術を専門にしている方たちに考えてもらいたいことは、それを日本美術という枠組みで語ることができるかどうかです。現在、アイヌ国立博物館を建設中ですが、国立とすることがよいのか人類学者として考えています。今後日本美術を語るとき、そのようなカテゴリーを使ってよいのかも少し考えていく必要があるように思います。

司会　パネルディスカッションでは、おっしゃるような視点で有益な議論をしていただけたのではないかと思います。

事前に専門家の方々にパネルディスカッションの場でのご発言やご質問をお願いするべきでした。来年は事前にきちんと構成を考えて準備できるようにします。

ウィブケ・シュラーペ　1人のプレゼン時間40分は長すぎると感じました。メインテーマの発表は20分ほどにして、もっと発表の数を多くしたほうがよかったと思います。プログラム自体は非常に有益でした。

司会　皆さんは、各プレゼンテーション後、質疑応答の時間を設けたほうがよいとお考えでしょうか。

ウィブケ・シュラーペ　プレゼン時間を20分にして、10分間ほどの質疑応答時間を設けたほうがよかったと思います。質問をすべてパネルディスカッションで対応しようとすると、最初の質疑応答がディスカッションの流れを決めてしまい、バランスがとれなくなる場合もでてきます。

ワイイー・チョン　シンポジウムをプログラムの早い段階に実施すれば、エクスカーションやレセプションの間にもシンポジウムの内容を踏まえて多くの討議ができたと感じます。今後は順番を少し変えてはどうでしょうか。

塚本 麿充　私の専門は中国美術ですが、海外で日本美術を勉強されている方に興味があります。今回、そのような方が、どのような展覧会を企画され、どんなことを考えているのかをよく知らなかったことを痛感しました。たとえば、北京に平安朝の文学を研究している人が20人以上いて、『伊勢物語』の読書会を開いていますが、彼らがどんなことを知っているのか、どう考えているのか、僕たちは知る努力をあまりしませんでした。私は以前、東博にいたこともあり、東博は日本がどれだけすごいのかを示す博物館ではなく、創設時に「世界の文明に対して貢献できるような博物館になる」と宣言しています。どうすればいろいろな物語を取り入れることができるかを考えながら聞いていました。皆さんにお聞きします。展覧会を企画されるとき、どのような方を想像されているのでしょうか。また、日本の人たちにどんなことを伝えたいと考えておられるのでしょうか。

ウィブケ・シュラーペ　難しい質問です。普通、手元にどんな作品があるかといったことをもとに、1年ほど前から企画を考えますが、そのときの状況が重要です。たとえば、日本だとオリンピックは大きなテーマで、それにあわせて展示会を計画すると思います。

2021年は、福島の原発事件から10年になります。原発事故直後、ドイツは政策と

して原子力発電を中止する方向に動きました。2021年の展覧会では、福島の話だけではなく、原子力発電に対する批判や反発なども含まれるかと思います。

展覧会を企画する際は何をテーマにするのか、自分自身は何に興味があるのか、社会は何に関心があるのか、どのような反響があるのか、どうアートと関連付けるのか、所蔵のコレクションとどう関連付けるのかなどを考慮します。来館者にとって一番興味のあることを考える必要があります。

中村 冬日　震災の話がでましたが、私たちの館でも東日本大震災をテーマに、世界での災害などを考える展覧会を予定しています。宮城や福島の博物館の方々と連携して、人類学的な発表と芸術的な発表などを混ぜたような展覧会を計画しています。

モニカ・ビンチク　デコラティブアートが専門なので染織の取扱講座や着物構造のワークショップは特に非常に興味深く、役に立ちました。

メトロポリタン美術館では源氏物語に焦点を当てた国際展覧会を3月5日から6月16日にかけて開催する予定です。その期間中の4月12日、13日にシンポジウムを開催しますのでまた皆様にそこでお会いできたらと思います。

ルパート・フォルナー　昨年“キモノファッション”という仮題の展覧会を企画しているとお伝えしたかと思いますが、オリンピック前の2020年2月21日から6月までの4か月間にＶ＆Ａで開催されることになりました。着物をファッションアイテムとして見るだけではなく、17世紀には着物が西洋に渡り、西洋のドレスに影響を与えたことも紹介します。過去10年、15年ほどの間に日本のファッションに新しい発展がありました。特に若い人は着物を古い日本のシンボルとしてだけでなく、着て楽しむものとしてとらえるようになりました。同時に西洋のデザイナーも、着物のデザインからより多くの影響を受けるようになっています。この展覧会の担当者は、着物ほど世界的に影響力を持つ衣類は他に無いと考えているようです。

モニカ・ビンチク　2020年は“着物の年”になるということを付け加えたいです。東博でも着物に関する展覧会が開催されますし、メトロポリタン美術館でも国際的な観点から見た着物に関する小規模な展覧会を開催します。全ての染織の専門家と一緒に着物の美を世界中に広めていきたいです。

田沢 裕賀　東博では2020年オリンピックの年の春に、広く時代を越えて着物をテーマとした展覧会を開催します。

また秋には、室町時代から江戸時代の初めまでの100年間で、何が変わっていったかという観点で展覧会を開催します。この100年の間で、日本ではヨーロッパの波を受けて産業のあり方、侍たちの戦い方も変わります。視野も変わります。この展覧会には海外からもご協力いただきますので、是非見に来ていただければと思います。

白井 克也　九博で今年計画している展覧会から2つ紹介します。まず、7月から9月初めにかけて「室町将軍」展を開催します。室町時代には15人の将軍がいますが、そのうち13人の姿を現した等持院所蔵の彫刻をすべて公開します。また、室町時代は、日本独自の美意識が洗練されて現代につながる茶の湯などの芸術が確立された、日

本にとって重要な時代です。ICOMの京都大会に出席される方は是非福岡空港に着陸していただきたいと思います。

もう一つ、10月末から12月まで、山梨県の釈迦堂遺跡を中心とした縄文土器と土偶の展覧会を計画しています。ユニークな縄文文化の中心地である山梨県の、その最盛期のコレクションを九州で初めて公開します。皆さんの議論をお聞きして、どのように解説したらよいのか、議論したのに「そんな解説じゃ駄目だ」と叱られることを若干心配しておりますが、見ごたえのある展覧会にする予定です。

朝賀 浩　午前中、専門家会議の席上で、日本美術の公開条件の規制をもう少し緩和ができないかといった提案がありました。それに対して、「脆弱な文化財に負担をかけるわけにはいかないので難しい」と説明しました。その代わりの作品や企画に沿うような作品を紹介したり、協力者を増やしたり連携を組むことを検討しています。

日本美術を勉強している日本と欧米の学生たちが交流する機会を継続的に設けることを目的として、日米大学院生会議の開催を文化庁が支援しました。しかし、学生交流は文部科学省が担当するので、文化庁としては博物館スタッフの交流をやろうということで、東博にご負担をかけてこのような国際シンポジウムを継続的に開催しているところです。本プログラムを基に、諸外国で日本文化を紹介する展覧会の企画が、日本側の協力のもとでいくつか実現しました。

近年、文化庁は機構改革の一環として、東京国立博物館内に文化財活用センターを設置したため、今後、日本文化を諸外国の方々に紹介・発信する枠組みが少し変わる可能性があります。今後どのような方向になるか、文化財活用センターがどんな役割をはたすか、簡単に諸外国の方々に紹介してください。

三田 覚之　文化財活用センター設立の目的は、文化財をより広く知っていただくことです。

活動には4本の柱があります。文化財の公開促進、文化財の保存環境についての提言、情報公開、企画です。具体的には、東博の収蔵品には日本の各地域から出土したものや、各地域出身の作家にかかわる作品など、さまざまな分野のものがあります。それらはこれまで東博で主に展示されてきましたが、センターが輸送経費などを負担して各地方での公開を促進していくことが文化財公開促進の内容です。

次に保存についてご説明すると、都道府県にある美術館・博物館は、必ずしも収蔵庫や保存体制が十分に整っているわけではありません。特に温湿度など、作品に直接影響する環境設備が不十分な施設も少なくありません。そのような施設からの相談窓口を設け、当センターの職員を派遣して、適切な処置法や改善策などを指導することも計画しています。

さらに情報の公開については、国立文化財機構が所蔵する約12万8,000件に上る作品の来歴や情報を公開することで、多くの方々に文化財をより詳しく知っていただく取り組みを行っています。

企画部門では博物館が所蔵する作品について、美術にあまり関心がない方にも、作品が持つ歴史的背景や世界観をわかりやすく紹介できるよう、さまざまなデジタルコンテンツや複製を用い、五感で感じていただけるような企画を推進しています。

朝賀 浩　2018年、パリで大規模な日本文化を紹介するキャンペーンが展開されました。日本政府として、日本文化を紹介する活動を続けていきます。ただし、文化庁

だけでは引き受けきれないような規模もあるため、さまざまな方々に協力してもらえるような会議を設けています。日本文化の発信の機能などを国立博物館におんぶに抱っこするのではなく、全国の博物館施設でも協力できるような力量を持ってもらうことも必要になります。題箋でも、中国語と韓国語を強く意識されているのであれば、この会議にアジアの人々に参加していただくのもよいかと思いますし、国立博物館以外の方々にも海外の方々との交流機会を広げていくようにしたらよいと思います。

司会　少し話題を戻し、海外の博物館、美術館が何を行っているのか必ずしも知らないというご意見もありました。今回は皆様に宿題を出すことができませんでしたが、すべての参加者に、それぞれの博物館・美術館でどんな仕事をされているか、また美術館・博物館の短い紹介文と、今後予定されている展覧会の情報などもお寄せいただくことを来年に向けて検討します。

遠藤 楽子　来年開催されるICOM京都大会のPRのために、昨年、ヨーロッパで開催された国際委員会の一つに出席しました。そこで感じたことは、博物館で扱うあらゆる分野で日本美術が周辺にも存在しているはずですが、私たちが思っている以上に日本は遠いところだということです。そのとき出会った方たちの話からは、距離だけではなく、気持ち的にもお金の面でも日本が大変遠い国であることを実感しました。

　来年開催されるICOM京都大会に、このように日本美術の周辺分野にかかわっている方々がたくさん集まります。この機会に、本プログラムが5年間積み重ねてきたことで貢献できることはあるのでしょうか。それによって、日本の若手専門家を、今後掘り起こしていく、もっと広げていくという課題に対応するという選択肢もあると思います。事務局として、ICOM京都大会との関連について今回いらしている海外の方たちにお聞きしたいことはあるでしょうか。

司会　このプログラムが始まった理由の一つは、日本美術を勉強する人が減っているので、もっと多くの人に勉強してほしいということでした。このプログラムは日本美術にかかわっている方々が対象です。若い大学院生や大学生にも広げるべきかもしれませんが、現時点では少し難しいかもしれません。日本美術を勉強する人を増やすためには、プログラム全体を変えていく必要があるでしょう。博物館、美術館にかかわる人々の日本理解を深めていくためのネットワークを構築することも、このプログラムの目的の一つです。これに何か付け加えることはありますでしょか。

山梨 絵美子　日本の美術品の取扱いや保存環境に関する啓蒙的な書物を、東京文化財研究所で出版しています。文化財活用センターなどと協力して、文化庁は文化財保護について「みんなで守る文化財」をうたっていますので、多くの方に文化財保護や手当てについて知っていただく方向でご協力していきます。ちなみに、在外日本美術品修理事業の報告書は英語でウェブサイトに載っていますので、参考にしてください。

司会　皆さん写真を撮ったり記録を取ったりしますが、それを「ソーシャルメディアに載せていいですか」「ウェブサイトに参考情報として載せていいですか」とよく

聞かれます。それには難しい問題があります。文化財ですので、写真や記録をウェブサイトなどに載せるにはチェックが必要です。以前のワークショップでも、施設によって異なることが指摘されましたし、特定の作品について、一つの取扱法が唯一の正解であるという印象を与えたくないという意見もありました。欧米のウェブサイトやソーシャルメディアに、「このようにして日本では文化財を扱っています」と載せてしまうと、それだけが唯一の方法だという印象を与えかねません。ただし、昨年、皆さんが撮った写真や記録は皆さんの同僚や保存修復スタッフとシェアしていただくのは構いません。

ローラ・アレン　2019、2020年には、1年を通して日本美術に関する多くの展覧会を計画しています。春の“着物リファッション”展で始まり、タトゥーや浮世絵の展覧会、イサム・ノグチと長谷川三郎の展覧会も続きます。田邊竹雲斎のコレクションも今年の夏に展示します。

原 まや　さきほどビデオを使ってのソーシャルメディア、ウェブサイトに掲載する話がでましたが、日本は保護しすぎるのではないでしょうか。著作権を気にしすぎて、日本の文化やアニメ、ドラマなどを共有できないという問題があります。たとえば、韓国のドラマはアメリカでは人気のあるストリームで流されているので、若い人たちが影響を受けています。ドラマにはまって韓国語を勉強している人がたくさんいます。韓国ドラマは日本ドラマにかなり依存しているところがありますが、そのことはアメリカでは知られていません。なぜ日本は著作権にこだわって外にださないのかよくわかりません。ソーシャルメディアに流すと、すごく人気がでると思います。これから先、文化財の複製を作成して触ってもらったり、日本はもっとソーシャルメディアを使って日本文化を宣伝したほうがよいと思います。

内藤 栄　奈良国立博物館でも問題になっています。自由に写真を撮ったり、皆さんが撮った写真を使っていただいてもよいのですが、日本の文化財の厄介なところは、国立博物館や他の県立・市立博物館が所蔵する以外、特にお寺、神社の作品が多いという点です。それらは信仰のなかにあります。奈博は親鸞聖人像を収蔵していますが、親鸞聖人はいまだに信仰されているので、勝手にどんどん展示すると仏教界から苦情があります。複雑な事情があります。私たちも葛藤を抱えていることをご理解いただきたいと思います。

アメリカのクリーブランド美術館でお手伝いをしている神道の展覧会が、4月8日から始まります。文化財活用センターの活動が報告されましたが、それぞれの館で独自の交流も行っていることを、付け加えさせていただきます。

井並 林太郎　寄託品の話は京都でも同じです。所蔵者への配慮が判断基準の大きな根拠になっているため、展示室でスマートフォンでは写真を撮れないようにしています。そのため、解説の多言語化においてスマートフォンを使うのにハードルがあります。当館は寄託品が収蔵品の大部分を占めており、当館でお預かりして守ってきた120年の役割をアピールし、再確認するという意味で、寄託品の名品展をICOMの期間中に開催します。日本美術のメインになる作品を当館でお預かりしているからこそ、現代で見ることができます。そういった意義を持った展覧会にしたいと考えています。

その後、秋には、平安の王朝貴族の世界を紹介する絵巻物の展覧会を開催します。日本人でも王道のような日本美術を知る機会も減っているので、王道の美術の魅力を知っていただければと思います。

司会　京都や奈良の国立博物館で撮影不可の寄託品のハンドリングワークショップを行いたい場合、その複製を使用すればその様子を撮影するということは可能かもしれません。

このあたりで意見交換会を終了させていただきたいと思います。参加者の方々に感謝いたします。毎年同じ人たちと再会することができるのは素晴らしく、ますます親密さも増しています。それから新しく参加なさった方々も本当に歓迎します。また、東博の関係者、プログラムを支援してくださった方たちにも感謝申し上げます。